

幼稚園教育実習のオンライン代替授業実践記録

－コロナ禍のもとでいかに教育実習の代替授業を行ったか－

田岡由美子 (龍谷大学短期大学部)

北村眞佐美 (龍谷大学短期大学部)

齊藤真由美 (龍谷大学短期大学部)

田中 知子 (龍谷大学短期大学部)

羽溪 了 (龍谷大学短期大学部)

【要旨】

2020年の年明けからの新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症拡大にともない、幼稚園教諭二種免許状取得を希望する本学短期大学部こども教育学科2年生の多くは、教育実習への参加が困難となった。そこでこども教育学科では、2020年秋に実施予定であった教育実習 (秋期) をオンラインを利用した授業 (6日間) で代替することとした。本稿は、オンラインによる実習の代替授業の企画・立案・実施、学生の学びについてまとめた実践記録である。具体的には学生と教員が Google Meet を使って、従来の教育実習 (秋期) で学生が体験すべき課題に即して、学生と教員が自宅から送受信して行った授業の内容、方法、学生の学びについて振り返り、オンラインを用いた実習代替授業の得失を明らかにした。

【キーワード】 コロナ禍の代替授業、教員養成、幼稚園教育実習、オンライン配信、実践記録

I はじめに

2020年の年明けから拡大の一途をたどった新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、われわれの社会・家庭生活のありようを一変させた。学校生活も然りである。幼稚園や小・中・高等学校は一斉休校となり、大学も各種行事が中止となった。2020年5月からは多くの大学でオンラインによる授業配信が開始された。保育士と幼稚園教諭二種免許状取得を目指す本学短期大学部こども教育学科では、保育所 (園)、幼稚園、認定こども園、児童福祉施設の実習の受け入れが相次いで延期・中止となった。これに対して文部科学省からは、大学の授業などを代替りの単位として認める特例措置の通達がなされた。本学科の幼稚園教育実習は、1年生の春休みに実施される教育実習 (春期・2週間) と、翌

年の10月に実施される教育実習（秋期・2週間）の計4週間に、学生が幼稚園に出向き実際の保育を体験することとなっている。そのため教育実習（春期）に関しては、コロナ感染症が次第に拡大する中多くの学生が実習先でリアルな子どもとの関わりを体験することができていたが、2020年4月～5月にかけて発出された緊急事態宣言により、教育実習（秋期）の受け入れ確保は難しい状態となった。同様に、保育士資格取得のために必要な2週間の保育実習Ⅰ（保育所）の実習は、春休みにかろうじて終わることができていた。しかし残りの、①児童福祉施設での2週間の保育実習Ⅰ（施設）、②保育所か施設のいずれかを学生本人が選択して参加する保育実習Ⅱ（保育所を選択）・保育実習Ⅲ（施設を選択）の2週間の実習は2020年夏季休暇中に実施予定であったが、コロナ感染拡大を受けて施設側からは実習受け入れの中止が相次ぎ、実習先の確保は困難を極めた。このような前代未聞の厳しい状況を踏まえて検討した結果、施設や園の子どもたち、先生、そして学生の命を守ることを最優先に考え、加えて2年間で二つの資格・免許の取得が確実にできることを目指して、本学のこども教育学科では残された実習全てをオンラインによる代替授業とすることにした。

本稿は、2020年度教育実習（秋期）をオンライン配信による代替授業として実施した6日間の授業実践記録である。実習期間に関しては文部科学省の特例措置に則り、2020年1月から2月にかけて現場に出向いた2週間の幼稚園教育実習（春期）に、オンラインを用いた実習の代替授業（以下、オンライン教育実習と呼ぶ）の6日間を加えた3週間（120時間）を実習単位とした。なお、こども教育学科では秋のオンライン教育実習に先立って夏季休暇中に、保育士免許取得にかかる代替授業もオンラインで行った。保育実習については、「2021年度龍谷大学短期大学部こども教育学科教育年報 うまれる・育つ・生きる〈いのち〉-コロナ禍における保育者養成の挑戦-」（龍谷大学短期大学部こども教育学科、2021、https://drive.google.com/file/d/1N03RSCTbs2A-BzoskNiyegqcC63aXI9_/view?usp=sharing）にその詳細を掲載しているので、参照されたい。

Ⅱ 概 要

■実施期間：2020年10月5日（月）～10月10日（土）（9:00～17:00）

■対象学生：幼稚園二種免許状取得を目指す2年生。毎週水曜日に合同で実施される実習指導授業の15クラスで班分けをして、クラス担当教員の名前を班名とする。

■方 法：学生と教員は Google Meet を用いてパソコンあるいはスマホで各自の自宅より参加。

■**進め方**：基本的には、夏に先行して実施したオンラインによる保育実習代替授業の方法を踏襲した。すなわち担当教員が、前日に manaba（クラウド型教育支援サービス）に当日の授業内容や流れ、視聴動画を掲載し、学生はそれを確認して見直しをもって翌日の授業に参加できるようにした。当日はテーマの担当教員が講義を行い、その後テーマに基づく3つの演習課題を午前に1つ、午後に2つ学生に提示し、個人あるいはクラスごとの話し合いの時間を設けて話し合うようにした。その間、担当教員はヘルプ教員と協力して、「巡回」と称して Teams で設けた各クラスの部屋を訪問した。そこで学生から質問を受けたり、助言を与えたり、意見交換が活発でないクラスでは、教員がファシリテーターとなって討議の活性化を図った。夕方には全員が大講義室と称する Google Meet の部屋に集まり、より広い意見交換ができるように、クラスごとに話し合った内容を発表し合った。授業終了後、学生はその日の学びとして記録を書くようにした。そのために、その日の目的や学修内容を確認し可視化できるように、授業内容に即して表1「学びのノート：様式 A」、表2「保育指導案：様式 B」、表3「学びのまとめ：様式 C」の3種類の用紙（文末の資料を参照）を作成し、事前に学生に配布した。

■**授業の内容**：短期大学部が発行している『龍谷大学短期大学部 社会福祉実習 保育実習・教育実習 実施ハンドブック』（龍谷大学短期大学部社会福祉学科・こども教育学科、2020）を中心に、その他様々な教育実習についての書物を基にして実習に必要な内容を練った。学生は子どもとのかかわりや幼稚園の1日の流れは一度体験しているとみなした上で、より学びを深めるために、幼児教育を進めるにあたって核となる保育の指導計画の立案（Plan）・実施（Do）・振り返り／省察（Check）・改善（Action）といったPDCAサイクルの体験と、それを支える子どもの観察（Observation）と理解（Understand）、環境構成の重要性、子育て支援、さらにはコロナ禍における保育の留意点を組み込んで6日間の内容とした。また10月は運動会シーズンであり、園行事も意識した。幸いに10月にはコロナ感染が沈静化しつつあり、大学では週に2日ほど来校しての対面授業が許される状況にあったため、運動会の親子競技実施と称して5日目のみ学生を来校させて対面授業を行い、ハイライトともいうべき運動会という行事に向かって他の授業内容を配列する工夫をした。

Ⅲ オンライン教育実習（秋期）1日目（10/5・月）

目標 1. 幼稚園の役割と機能について再確認する。

目標 2. 近年の幼稚園の傾向と特徴を理解する。

目標 3. 保護者支援のあり方や地域の子育て支援の取り組みを学ぶ。

1 授業内容

最初に、幼稚園の役割と機能を再確認するために、近年の社会動向と人々の意識の変化にともなう幼稚園の現状と法規について講義を行った。その後、DVD 視聴を通して幼稚園の1日の流れも再確認した。これは、実習先の一つであり卒業生も就職している京都市東山区にある泉山幼稚園のものを使用させていただいた。それにはコロナ対応として通園バスの窓を開け、密にならないように着席している子どもの登園風景から始まり、昼食時にパーテーションで仕切、黙食している姿や自然豊かな園庭で自由に遊びまわる園児たちの姿、さらには子どもたちの降園後に、園内をくまなく消毒する先生たちの姿が映し出され、コロナ感染防止という厳しい状況の中で行なわれている保育の一端を垣間見ることができる。次に、教育実習（春期）でお世話になった幼稚園や自宅周辺にある幼稚園をインターネットで検索し、その教育目標、保育内容、行事などの特徴、さらには預かり保育や特別保育、給食やバスの送迎、2歳児保育、宗教的背景の有無等を各自で調べた。これは、幼稚園の特色が地域の実情や保護者のニーズに支えられながら様々にあることに気づくためである。午後からは収集した個々の情報をグループで共有し、時代や社会状況に即した幼稚園の役割や機能を確認した。最後に、子育て支援の中核施設としての幼稚園の役割を学び、その後、オンライン教育実習の5日目に実施予定である、唯一対面形式で行なう運動会の親子競技の案について話し合った。

2 今日の学びを通じた学生の感想・発見・課題

(1) 現代社会における幼稚園の現状を再確認した

- ・私の近辺は幼稚園よりも保育園やこども園が多く、共働き世帯が増えていると実感した。
- ・母園はホームページもなく、写真を見ると遊具は3つくらいしか写っていなかった。園児の数も少なくなっていると聞いた。・・・母園を見て、経営の難しさを、少子

化の加速を目に見えて感じて、とても寂しい気持ちになった。

(2) 幼稚園におけるさまざまな特色を理解した

- ・公立と私立の園で行事の差があったり、私立の園の中でもキリスト教や仏教という宗教の違いや給食や制服の有無、さらには英語、体操、ピアノ、茶道に力を入れたりなど、さまざまな違いが園によってあると思った。その背景には、長い時間子どもを預けている時間を有効に使い、子どもにいろんな体験をしてほしいという親の思いに納得がいった。
- ・何をするにしても一度立ち止まって、この活動は子どものためになっているのかを考える姿勢の大切さを感じた。保育者、幼稚園、子どものニーズを分けて考えられる幼稚園教諭になりたい。

(3) 幼稚園におけるコロナ対策について知った

- ・コロナ禍の食事対策として印象的だったのが、パーティーションに折り紙で作ったハートや雪の結晶が貼り付けてあったことだ。子どもが少しでも喜び、楽しむことのできるようにしたいという先生方の思いや工夫が伝わってきた。

(担当者：田岡 由美子)

IV オンライン教育実習（秋期）2日目（10/6・火）

目標 1. 学びを支える保育環境について理解を深める。

環境を通して行う保育を基本とする幼児教育において、幼児が生活を通して周囲のあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境にかかわることにより様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験の重要性を、実践的に理解をしようとするものである。以下、その演習課題とそれに向けた講義の内容をそれぞれ報告する。

1 授業内容

(1) 学びを支える保育環境について理解を深める【講義 1】

幼児教育では、子どもの自発的な遊びを「学び」ととらえる。子どもは様々な環境に働きかけ、遊びという形で、何度も同じ行為を繰り返す。それによって、環境を理解し、環境に合わせて能力を獲得する。そのために幼稚園では、子どもが自発的に環境と関わりを

もち、豊かな学びを得ることが出来るように環境を構成することを確認した。

子どもの学びを支える環境の特徴として、①子どもが安心し、自律的に行動出来る。②子どもの多様性を尊重する。③子どもの活動を継続的に考え、保障する。④子どもが挑戦、探求、失敗等の試行錯誤が出来る。⑤子どものことばや思いに基づき、創造的なオープンエンドとなる。の5つの観点を示し、このことが、子どもは有能な学び手という「子ども観」、遊びは子ども自身が作り出すものという「遊び観」、保育者の役割が子どもの今と未来の幸福追求の援助者という「保育観」に関わる問題として捉えた。

その上で、環境を構成する8つの要素－人、自然、物、情報（刺激の量）、空間、時間、動線、温度・湿度・空気の質や、環境構成の3つのポイント－子どもの発達に合った環境、様々な興味・関心を引き出す環境、子どもが主体的に動ける環境－を示し、更に、「学びを支える保育環境」の切り口として、①豊かな話し言葉を育む。②読み書きの土台を育む。③数量感覚を育む。④安定した身体を育む。⑤思考力の土台を育む、環境を示し、後の演習に向けての手がかりとした。

(2) 学びを支える保育環境について理解を深める～あんず幼稚園の保育内容から～【演習1】

幼児教育で育みたい資質・能力を着実に育む環境を整え、新時代の幼児教育の実践で注目を集める、あんず幼稚園（埼玉県入間市）のホームページを個々でみることにした。そして同園でなされている保育内容が、先の講義で示した、「学びを支える環境」、「環境を構成する要素」、「環境構成のポイント」のどの項目に当てはまるかを調べ、学びのノートに書き上げ、その後にグループで話し合い、環境が、同園において具体的にどの様な活動に繋がるかを検証し、自身の教育実習（春）の経験とあわせて振り返り、保育内容を環境の視点で見直す演習を行った。

(3) 〈読み書き〉の土台を育む環境の実践的体験～文字に関心を持つ保育環境～【講義2】

学びを支える保育環境の切り口、「読み書きの土台を育む環境」の実践的体験を目的とし、「文字に関心を持つ保育環境」をテーマとする演習に向けて事前講義を行った。題材としては、筑波大学附属小学校、笠 雷太教諭による「“まちもじ”探検」の実践報告のパワーポイント資料を使い、子ども達を含め私達の生活圏にある様々な文字であるところの“まちもじ”への気付きを促した。

(4) 実際にそれぞれの環境をフィールドワークで確認する【演習 2】

家を出て、看板等の文字を探索する活動を行った。そこで写真を撮るなどして、生活にある、意味としての文字よりも、記号・模様と言った造形的視点で、身近な環境としての文字への関心に繋げた。

(5) “まちもじ”を環境とした保育案の検討【演習 2-2】

集めた“まちもじ”を環境とした保育案をまずは個人で考え、その後グループで共有しながら、グループとしての保育案を作成した。

(6) “まちもじ”を環境とした保育案の発表【演習 2-3】

作成した保育案のうち、数グループの発表を全体会で行い、共有しながら、自分達の保育案の振り返りを行った。

2 今日学びを通した学生の感想・発見・課題

(1) 保育における環境について

- ・環境を軽視し、子どもが楽しむ為には何が必要なのかだけを考えていた。だが本当に楽しく夢中になれる遊びを考える為には、環境というものが必要不可欠なのだ学ぶことができた。
- ・環境を通して「子どもの感性を育てたい」と書いていたが、「子どもの感性を引き出したい」という視点を忘れてはならないと感じた。
- ・環境を多方向から見て、保育の内容を今一度捉え直して演習を行った。グループでは保育の内容を捉え直すことに留まらず、この活動は子どもたちにどのような意味を持つのか、この活動を選んだ保育者の真意は何なのか等、一つのことから派生して様々なことを考えていった。
- ・身近な物事から発展させる遊びが意外にも沢山あると実感した。春期の実習では「如何に楽しんでもらうか」を焦点に設定保育を考えていたが、それよりもっと意識することがあったということ学んだ。

(2) 文字に関心を持つ保育環境について

- ・子どもたちが文字に興味を持つきっかけは、絵本だけでないということの確信を得た。

(担当者：羽溪 了)

V オンライン教育実習（秋期）3日目（10/7・水）

一人ひとりを大切にする保育について理解する。

目標 1. 集団を個の集まりであることを理解する。

目標 2. 集団活動をする上で、「個」に配慮する方法を学ぶ。

目標 1. に対しては、演習①②を、目標 2. に対しては演習③を行った。学生の学びが段階的に深まるよう個人ワーク、グループワーク、全体共有を織り交ぜて演習を行なった。

1 授業内容

(1) 集団とは個の集まりであることを理解する

園生活において子どもたちが集団で活動する場面は多い。それでも、集団の中で過ごす一人ひとりの思いに気づき、丁寧に対応することが保育者には求められる。学生には「こんな子どもがいるかもしれない」「その子どもはこんなことを思い、考えているかもしれない」などと、様々な角度から子どもの様子や思いを推論する力を身に付けてほしいと考えた。

そこで一つ目のワークでは、教室や園庭、公園などで様々な子どもがいる3種類のイラストを用意した。それらを手がかりに、自分がどのような子どもであったかをメモに取り、クラスのメンバーに説明するよう指示した。互いのエピソードを聞くことで、学生が「こんな子もいるんだ」という、様々な「個」の存在について気づくことをねらいとした。

次に二つ目のワークでは、前のワークで分析した「自分の姿」を念頭に置きながら、当時の担任の先生に「実はね…」と伝えてみたいことを考え、その発表を行なった。先生は気づいていなかったかもしれないが、その当時自分が伝えたかった気持ちや考えをクラス内で共有し、仲間の様々な思いを知ることで、一人ひとりを理解することの難しさに気づくことを目的とした。

二つのワークを行った後、全員で演習のまとめを行なった。いくつかのクラスが話し合った内容を発表し、他の学生は、それに対しての質問や感想をコメントしたりチャットに書き込んだりしながら、さらに様々な「個」がいることを学んだ。

演習②では演習①での学びを踏まえ、集団の中で「一人ひとりを大切にするため」にはどのようなことが重要であるかを、ワークシートを用いて検討した。保育を行う上で、子

ども一人ひとりを支えるための技術や方法を具体的に学ぶことは大切であるが、自分の価値観や、考え方の傾向を自覚しておくことも重要である。なぜならば、それが各人の保育観に繋がっていると考えられるためである。そこで「一人ひとりを大切に作る保育のための先生の『しごと』を考えてみよう」と題したワークシートを用いて演習を行なった。まずは、筆者が示した見本を手がかりに、学生は自分が思う「先生のしごと」を空欄に埋めた。その上で「一人ひとりを大切に作る保育」のために大切に考えるものを、その中から三つ選ぶというワークを行った。書き出したり、選んだりする際の留意点として、「先生のしごと」を目に見える作業としての側面で捉えるのではなく、園での自分の「ふるまい」と意味づけるよう促した。具体的には、「掃除をする」「連絡帳を書く」などのしごとを挙げるのではなく、「掘り下げる」「演じる」「応える」など、抽象度を高くして考えるよう伝えた。

(2) 集団活動をする上で、「個」に配慮する方法を学ぶ

演習③への導入として、子どもが体験する集団での活動の一つである、音楽的な活動を行った。オンラインであるため限定的ではあるが「一人ひとりを大切にしながら、音楽を楽しむ」技法を用いて活動を展開した。その後、なぜこの活動が「個を大切にしながら音楽を楽しむ」ことに繋がるのかという解説を行なった。

導入の後には集団で活動する場面での「個」に配慮する方法の講義を行なった。活動における個の「違い」にも様々な種類があり、そのままにしておく「みんな」で楽しめなくなる「違い」もあれば、大事にしたい「違い」もあることを説明した。例えば、既存の曲を歌う場面で歌詞やリズム、音程など本来のものと個の活動に「違い」がある場合は、それぞれが楽しめるように、状況に応じた適切な援助が必要となる。他方、友だちの声や楽器の音に対して我慢できないといった、子どもの側に感覚過敏等の「違い」がある場合も存在する。どちらの「違い」であるか考える必要があることを伝えた。また後者の場合でも、活動に無理に参加させないという配慮だけでなく「どのような形ならば、活動が楽しめるか」という視点をもつことも大切であることを伝えた。このように「個」を大切に作る配慮においては①できることを組み合わせながら、段階的に活動の可能性(幅)を広げていくこと、②今行っている「活動」の中だけで、子どもが参加しづらい原因の分析や解決を目指そうとしないことが重要であることを伝えた。また、日常生活のあらゆる場面から子どもの姿を分析し、解決策を導き出すことが大切であると説明した。

以上の体験と講義での学びを踏まえて、演習③を実施した。その内容は、音楽的な活動において①活動に乗り気ではない、②音に過敏であることを理由に「参加していない子」

に対して、それぞれどのような対応が考えられるか、その対応を行なった場合の子どもの姿を予測しワークシートに記入させた。個人ワークで考えたアイデアをグループで共有する際には、誰のアプローチが正解であるかという観点で議論するのではなく、子どもへの対応やそれに伴う子どもの様子を様々な角度からイメージし、話し合うことを勧めた。

2 今日の学びを通しての感想・発見・課題

- ・子どもたちが見ている世界を私自身も一緒に見て感じることができるよう、子どもの見ている視点に気づいていけるようにしたい。一人ひとりを理解することは非常に難しいことであるが、今後出会う子どもたちから常に学び続ける姿勢を忘れないようにしたい。
- ・音の感覚の違いがある子どもへの配慮として、「音がしんどい」=「参加したくない」と捉えないことである。大人の勝手な解釈で解決せずに、子どもの思いに寄り添って、その子がどのような形なら参加できるのか、参加したくなるのかを保育者は模索することが大切だと思った。

(担当者：田中 知子)

VI オンライン教育実習（秋期）4日目（10/8・木）

- 目標 1. 子どもの発達の特徴や実態に基づいて作成する指導計画について理解を深める。
- 目標 2. 「計画は綿密に立て、実践は柔軟性をもって行う」の意味を実感し、保育実践への理解を深める。

目標 1. は演習①での指導案作成を通して学ぶことができるよう、目標 2. は演習②③での模擬保育を通して学ぶことができるようにプログラムを進めた。

1 授業内容

本日举行演習についてのおおむねの内容は、学生には2週間ほど前に伝え、準備を進めながら積極的に取り込めるように配慮した。そこで、講義では、子どもが手遊び「やきいもグーチーパー」の活動の中で何を体験するのかをしっかりと考えたり、発達の特徴をとらえて考えたりしているのかを問いかけることから始めた。そして、子どもの活動の中には様々な経験が総合的に含まれていることや、ジャンケンと子どもの発達の姿が共通理解

できるような内容を伝え、目標 1. の学びに向かえるように考えた。例えば、手遊びを楽しむと捉えるだけではなく、歌（歌詞・リズム）を楽しんで遊ぶ、手の動きや体の動き、あるいは表情を楽しんで遊ぶ、先生の動きを真似ることを楽しんで遊ぶ、等の経験する内容が含まれていることを伝えた。ジャンケンを楽しむのであれば、ジャンケンの勝ち負けを理解しながら遊ぶ、友達とジャンケンすることを楽しんで遊ぶ、体を使ったジャンケンの仕方を考えたり伝えたりして遊ぶ等の経験する内容があることを伝えた。そして、学生は当然のように使っているジャンケンであるが、子どもたちはどのようにして手の動作を獲得し、勝敗を理解し、さらには、ジャンケンを生活の中に取り入れていく力を身に付けていくのだろうか、ということを探ね、説明した。

講義で次に伝えたことは、演習②③の模擬保育についての詳しい説明である。わからない不安を持たずに取り組めるよう、方法や手順を丁寧に説明することに加えて、全員が共通理解し協力し合うために必要だと思われることを伝えた。オンラインで行う模擬保育は、同じ空間の中でお互いを感じ合うことができないという不便さがある。そんな中で仲間とつながり、学び合うために必要だと考えたことである。方法としては、保育者役と子ども役はカメラ・マイク ON で参加しタイトル表示すること、参観の保育者役はカメラ・マイク OFF で参加し、よく観ることを伝えた。心構えとしては、本気でそれぞれの役になり、相手に遠慮せず思いを表す努力をするよう、また、画面に見えていることや聞こえてくることだけではなく、イメージを広げながらかわる努力をするように伝えた。

演習では、演習①で指導案を作成し、演習②③で模擬保育を行ったり話し合ったりするというプログラムを通して、目標 1.2. の学びを深めることを目指した。模擬保育の実践は、計画を綿密に立てる必要性を実感する経験にもなり、計画どおりにはいかず柔軟性をもって対応する必要性を実感する経験にもなり得る。より多くの経験ができるように工夫したことのひとつ目は、模擬保育の役割（保育者・子ども・参観の保育者）を交代して行うことである。子ども役になることで子どもの考えや思いに気付くことができ、参観の保育者役は客観的に、また余裕を持って保育者・子どもの姿を観て気づくことができる、と考えたからである。二つ目は子ども役の中に、活動に入ってこなかったり、途中でトラブルになったり等が起こる A 児・B 児の存在を意図的につくることである。いろいろな子どもの考えや思いに気付いたり、臨機応変に関わったりする経験がより多くできると考えたからである。三つ目は、模擬保育後の話し合いの時間を十分にもつことであり、伝え合うことで多くの気づき生まれ、わからないことや心配に思っていることをそのまま終わらず、次に向かう力に変えていくことができると考えたからである。

2 今日の学びを通じた学生の感想・発見・課題

(1) 模擬保育で役割を交代したことについて

- ・子ども役になって、保育者が自分の名前を呼んでくれたり言葉を受け止めてくれたりすることがこんなに嬉しいのだと気付いた。
- ・保育者側と子ども側からの視点は大きく違うと感じ、子どもの目線になって考えることの大切さを改めて学ぶことができた。
- ・他の実習生の保育を観ることができて、自分にはないアイデアや受け止め共感する姿勢を学ぶことができた。

(2) 話し合いをしたことについて

- ・自分では気づいていないよかった点や改善すべき点、無意識にしていたこと等を客観的な視点で気付いて伝えてくれたので、改めて自分の姿を再確認することができた。
- ・問題点をどうしたらよいか、というところまで考えて意見を出し合うことができたので、学びを深めることができた。

(3) オンラインで模擬保育をすることについて

- ・リモート上のため、周りの子ども達のこととも考えて視野を広げることは難しい。しかし、他の学生から学ぶことが多くあり、次につなげることができると思う。
- ・表情や行動の変化、心情を読み取ることはオンラインでは非常に難しい。そのため常日頃から視野を広く持ち物事に敏感になることが重視されるのだと思った。

(担当者：齊藤 真由美)

Ⅶ オンライン教育実習（秋期）5日目（10/9・金）

目標 1. 幼稚園の行事・子育て支援の機能と役割について学ぶ。

目標 2. コロナ禍の行事として運動会の親子競技を企画、立案、実践、評価を行った。保護者との交流を図り、子どもの育ちの喜びを共感できる子育て支援の方法を理解する。

1 授業内容

幼稚園においても子どもの保育に加えて入園児や地域の家庭に対する支援が求められて

いる。これは幼稚園教育要領にも示されている。現在幼稚園での子育て支援は、第一に預かり保育、第二に家庭や地域における幼児期の教育に関する支援が求められており、これを目標とした。パワーポイントで在園児の保護者参加行事と地域の親子参加の行事の具体的な内容を示し、保護者も幼稚園生活を楽しみ、子どもの成長、子育ての喜びを感じる子育て支援につながることを説明した。現在、コロナ禍により幼稚園の行事が見直され、縮小され必須の行事が考えられていることに触れ、演習では、コロナ禍の子育て支援として有効とされる運動会の親子競技の立案、準備、対面で実施することとした。

種別	実施時間	実施場所	実施者
親子で楽しむ運動会	約 15 分	幼稚園	保護者・教員
親子で楽しむ運動会 企画案	約 15 分	幼稚園	保護者・教員

図 1 親子競技企画案

(1) コロナ禍の運動会に向けての親子競技の立案、準備

事前にオンラインで一人ずつ企画案を考案しグループ内で話し合い、実践競技の立案を行った。5日目は、必要な物の準備（用具・応援グッズ作成）、役割（司会、親子の誘導、音響、記録（後日ドキュメンテーション記録ポートフォリオ作成のための写真撮影）、応援、準備係等）を分担した。

(2) コロナ禍の運動会に向けての親子競技の実施

感染対策上、短時間で対面実習を行う。3講時にトレーニング室 1.2.3 に分かれて、企画した 15 競技を実施した。感染対策として全員検温、手指消毒、フェイスシールド、ナイロン手袋を使用した。ソーシャルディスタンスを考慮した座席設定も行った。

プログラムは、事前に準備、教諭、子ども、保護者、来賓園長の役割のローテーションを表にして全員が把握し短時間実施ができるようにした。1 競技内に参加する 5 グループは、役割分担でそれぞれ立場の違う者の活動や気持ち、意図を考えられるようにした。教諭グループは、入念な計画、準備をもとに、役割を確認し声をかけながら実施した。保育の現場での素早い行動が実施しできるように指示した。競技終了後は、除菌シートでトレーニング室の床、壁を学生、教員全員で清掃し感染予防対策を行った。

(3) コロナ禍での運動会の親子競技についての評価・反省・課題

保育実践後、教諭として評価、反省、考察を各自まとめ、全体会で報告し全員で振り返りを行った。対面で学生同士が企画準備し競技実施できた事は、大変喜ばしいという感想が表された。各グループでのオンラインで競技決定までに十分相談し、当日も話し合っ実施したが想定外の事態が起こった。しかし、即時声をかけ合い柔軟に進めることができたグループもあれば、想定外が上手く対応できなかったことが残念であると反省するグループもあった。子どもや保護者等、大勢が参加する行事は、詳細に計画したにも関わらず想定外のことが起こりうることを経験した。そこでの柔軟な対応が必要であることを学生が共有した。行事を通して子ども、保護者共に楽しく競技することが、幼稚園での子育て支援の役割であることを話し合った。

2 今日学びを通した学生の感想・発見・課題

- ・グループでの企画、立案は、これまでのグループワークの中では一番活発であった。
- ・コロナ禍という事でソーシャルディスタンスを考えた企画案は、部分実習よりも困難であった。競技使用の道具の作成は、楽しく行い詳細に話し合い準備した。
- ・実践では、最善の企画を立案した。しかし予想と異なったが、友達と即座に話し合い調整し連携必要であると分かった。
- ・司会進行は端的に明瞭にする工夫が必要で、記録係は機敏な動きが必要であることを知った。
- ・親子役は教諭の指示誘導で気持ちよく参加できることを知った。年齢別の設定で運動機能の発達差を考慮した競技の内容の違い、工夫をたくさん知る事ができた。

(担当者：北村 眞佐美)

Ⅷ オンライン教育実習（秋期）6日目（10/10・土）

目標 1. さまざまな評価のあり方について学ぶ。

目標 2. 実習全体の振り返りと今後の課題。

1 授業内容

最初に、ドキュメンテーション、エピソード記録、ラーニング・ストーリー、ポートフォリオなど、国内外で実施されているさまざまな記録の方法や特徴を紹介した。記録を通

して保育者自身の心の動きや子ども・遊び理解を省察すること、それが子ども理解や見方を変えることになって次の保育の支援方法や改善につながり、ひいては全体として保育の質向上の実現になることを説明した。その際、パワーポイントを用いて写真で具体的な事例を見せることによって、学生がイメージしやすく、理解しやすいように努めた。

次に、前日5日目に実施した運動会の親子競技の写真をもとにして、各自が保護者向けのドキュメンテーションを作成した。その際に、運動会の目的が親子の触れ合いのみならず子どもの成長を知ることを通して「保護者の育ち」の機会でもあったことを再確認し、保育者の思いや子どもと保護者が体験している内容、さらには親子で心通い合う場面について言語化して写真に添え、運動会での成長を可視化するよう助言した。午後からは、個人が作成したドキュメンテーションをクラスで発表し合い、さらにその中から代表を選んで、全員が集合して、オンラインで班ごとに発表し合った。その際に、お互いに工夫した点、優れていると思う点、新しい発見などを述べ合い、全員で共有できるようにした。加えて、発表時にはチャットを用い、学生や教員からのコメントが即時に表示されてリアルな反応を見ることができようにしたため、反応がすぐにわかり臨場感あふれる場となった。

以下は、学生作成のドキュメンテーションから抜粋したものである。



図2 親子競技の学生作成ドキュメンテーション

2 今日の学びを通じた学生の感想・発見・課題

(1) ドキュメンテーション作成の難しさ

- ・昨日の運動会の親子競技において何を伝えたいのか、どのようなことを書いたらよいのか、とても悩んだ。写真を用いて、どのように配置・構成するのも難しかった。
- ・正直、時間が無さ過ぎて大変だった。鉛筆の下書きで終わってしまった。

(2) ドキュメンテーションの大切さ

- ・色使いや写真の配置も大切だが、保護者の方や行事に参加していない人に伝えたいことをちゃんと文字にして伝えることもとても大切な点だと学んだ。
- ・ドキュメンテーションは、子どもたちの園での生活の様子を保護者や地域の人達に見てもらうことで人間関係を広げたり、新たな保育を生み出したりするきっかけとなるツールであることを学んだ。記録は振り返るものとして残るだけでなく、園や保護者、地域とのつながりを広げる役割もあるのだと実感した。

(3) 皆で考える・グループの絆

- ・教育実習（秋期）では個人で考えることは勿論、「皆で考える」ことが多かったように感じた。何か行事を企画する上で、人と話し合う、試行錯誤を繰り返すことの大切さに気づき、実践し他のグループの競技を見たらうえで改善点はどこかを話し合うという PDCA サイクルを、運動会を通し経験することができたと思う。
- ・昨日（運動会の親子競技）から今日にかけての活動で特にグループの絆が深まった気がする。グループの話し合いによって学びが深まったことも多くあった。これからもグループで意見を言い合えるような関係性を築いていきたい。

（担当者：田岡 由美子）

IX おわりに -6日間を終えて-

6日間のオンラインによる教育実習代替授業は、学生や教員にとってどのような体験だったのか、実習に代わる授業としてどうであったのかについて振り返っておきたい。まず学生の総括レポートには、実際に子どもとの関わりや保育指導案の実践ができなかったことへの悔しさや残念さ、現場で臨機応変に対応できるかといった不安感が数多く記されていた。また、個々人が自分のこととして受け止め、逃げることのできないリアルな現場での実習に比べて、オンラインによる代替授業は学生間での取り組みの真摯さに温度差があり、それに対して「妥協が許されてしまう」ことを指摘する声もあった。自宅のWiFi環境が不安定でしんどかったという学生もいた。加えて教員側にもこれでよかったのかという迷いや、それでもやれることをやったという諦念に近い思いがあったのも事実である。

他方学生からは、①伝え合う時間が持てたことによって自分とは違う仲間の考えや思いに触れ、たくさんの気づきが得られた、②一人一人の考えや思いを共有することで学びを深めることができた、③話し合ったり振り返ったりする時間の中で、自分の保育とじっくり

